

美術教育における言語表現と非言語表現に関する一考察

学生番号 22M21024 平田 琳太郎

本研究は、児童生徒の身体的な表現活動を構成する言語表現および非言語表現の要素の割合等についての調査、考察を基に、成長に応じた表現活動への言葉の影響を明らかにするものである。本研究での問題意識は、学校教育では、言語表現を通して感じ取ったことを一般化する授業活動が多いことである。言語化できないような感情や考えを他者に伝えるには、言語表現だけではなく、言語以外の方法による表現も重要である。そのため、調査にあたり、児童生徒が非言語表現したものを言語から想起したと考える表現として例示動作、言語以外から表出した表現を感情表出動作として分類した。加えて、発達段階の整理を行うことで、言語表現と非言語表現は学齢を通じて成長していくことを述べ、本調査においても同様の傾向を示した。

調査の方法は小中学生を対象に立体物の鑑賞活動を行い、感じたことを言語表現と非言語表現とで行った。その結果、①学齢が低いほど感じ取ったことをそのまま表現することと、②学齢が高いほど感じ取ったことを言語で整理してからジェスチャーで表現することの傾向が明らかになった。また、既知のものと未知のものを鑑賞対象物として鑑賞することで、既知のものであれば①のような表現が増加し、未知のものであれば②のような表現が増加することが明らかになった。

教育科学においても、非言語表現を通して児童生徒が感覚や知識や経験知と照らし合わせながら、作品から感じ取りを行うことは、個人にしかない感情や思いを表現する契機となりうる。また、異なる言語を扱う人とも交流をはかることができる点においても効果が期待できよう。

Keywords : 美術教育, 言語表現, 非言語表現, 発達段階, ジェスチャー

1. 研究背景と目的

学校教育の鑑賞活動では、感じ取ったことを相手に言葉で伝えたり、ワークシートなどに書き起こしたりする活動が多い¹⁾。

しかし、感じ取ったことからすべての概念を言語化し言葉で表現されるわけではない²⁾。美術教育では、言語表現だけでは言葉にできないような感情や考えを表現することも重要であり、そのためにも、言語表現とともに非言語表現を行い、児童生徒が感じ取ったことを感じたまま表現できるような実践が必要であると考えられる。

本研究では、美術の鑑賞や非言語表現について先行研究から整理し、言語以外の表現における表現と学齢との関係性について考察することで、児童生徒の言葉では表現できないような感情や考えの表出を捉える調査を行う。

2. 調査の方法

本調査では、小学校第1学年から中学校第2学年までの児童生徒を対象として行うこととした。調査の方法としては、鑑賞対象物として、既知のもの(三角柱)と未知のもの(有機形態)を鑑賞し、非言語表現で説明する活動と言語表現で説明する活動

をあわせて一人4回行わせた。

- 1) 既知のものを非言語表現 で説明
- 2) 既知のものを言語表現 で説明
- 3) 未知のものを非言語表現 で説明
- 4) 未知のものを言語表現 で説明

これらの言語表現・非言語表現の活動の様子を動画で撮影し、1秒ごとに表現を分析する。表現時間は、表現者が表現を終えたと思うまでと設定している。

児童生徒が非言語表現したものを、言語から想起したと考える表現を例示動作として、言語以外から表出した表現を感情表出動作としてそれぞれ分類した³⁾。加えて、言語表現を行い、非言語表現されたものが言語として置き換えられるものを例示動作とし、学齢と照らし合わせながら表現傾向を探った。活動後アンケートを行い言語・非言語表現の「表現の行きやすさ」の分析も行う。以上の結果から考察を行った。

3. 結果

図1より、既知のものを鑑賞して表現活動を行う場合、図の上部の学齢が低い群ほど黄色の感情表出

動作が多く現れているが、下部の学齢が高い群になるにつれて、緑色の例示動作が多く現れる傾向となったことが分かる。また、図2から、例示動作と感情表出動作で表現される割合においても、黄色の感情表出動作の表現割合は、年齢が上がっていくにつれ減少傾向が見られる。例示動作は、そもそも行わない児童生徒もいるが、多くは低学年の児童に当てはまる傾向である。また、未知のものを鑑賞して表現活動を行う場合は、既知のものを鑑賞した時より、例示動作が低学年においても表れる割合が大きくなる。加えて、感情表出動作は既知のものを鑑賞したとき同様に学齢が上がるにつれて減少傾向が見られる。

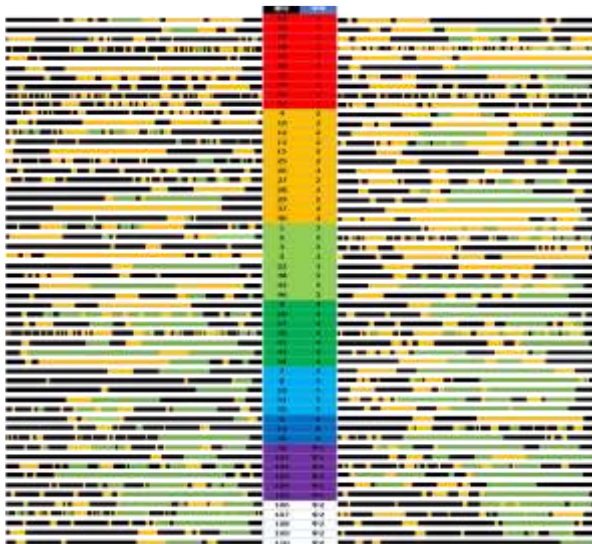


図1：既知・未知それぞれの例示動作と感情表出動作での表現の状況を時間によって明示した被験者全員の「percentage bar chart 100%積み上げグラフ」（左右のグラフは同一の児童生徒）

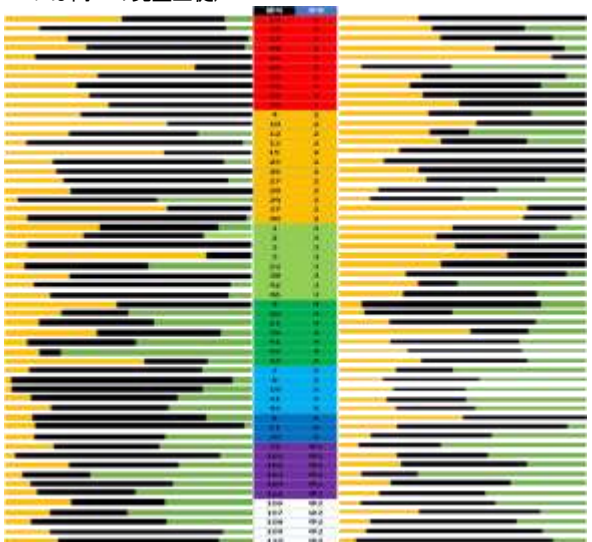


図2：既知・未知それぞれの例示動作と感情表出動作での表現の状況を動作ごとにまとめて明示した被験者全員の「percentage bar chart 100%積み上げグラフ」（左右のグラフは同一の児童生徒）

4. 結論

本研究において明らかになったことは、以下の2点である。

- 1) 児童生徒の表現や動作は、学齢が低いほど感情表出動作が、学齢が上がるにつれ例示動作が増加することから、表現において学齢が高くなるほど、言語に起因する表現がなされるようになる。
- 2) 児童生徒の表現は、知識や経験知の有無によって影響を受け、既知のものであれば、感情表出動作が表れやすくなり、未知のものであれば、例示動作表れやすくなる。

調査を通じて、学齢が上がるにつれ言語に依拠する例示動作が増加し、言語表現による表現が多く行われることが分かった。また、未知のものを鑑賞対象物として設定した場合、小学校低学年では、既知のもの説明よりも例示表現が増加し、中学生では、例示動作の表現方法が多様化することが明らかになった。

5. 結論と今後の課題

今後の課題としては、本研究における実践を授業として実践することや、量的な調査から、より信頼性の高い結果を得ること、感覚を通して感じ取ったことをそのまま表出する表現方法の実践を行うこと等が挙げられる。

6. 参考文献

- 1) 小林修「日本の鑑賞教育の課題」『美術教育』vol. 290, 2007, pp. 86-90.
- 2) 児玉徳美「概念化と言語化」『立命館文学』2009, pp. 755-774.
- 3) Wallace, V. Friesen 「The Repertoire of Nonverbal Behavior : Categories, Origins, Usage and Coding」1969, pp. 68-81.